

『天の国の秘密を悟る』

聖書 マタイによる福音書 13章 1～23節 讃美歌 14 505 57 510 25

説教 森田幸男牧師

今朝はただ今朗読されました箇所にあります、主イエス・キリストがなさった「種を蒔く人のたとえ」を通して、御一緒に神様の導きにあずかりたいと思います。

私たちがこの新会堂に移って早半年を過ぎたのでありますけれども、今回は、染森孝子執事の御長男の染森健一さんの指導を受けて、少し広くなった土地に計画的に草花を植えることにいたしました。染森さんは造園のプロでありまして、その経験からの知恵を加えていただいて、皆さんも日曜日に礼拝に来る度に花々がだんだんと広く、高く咲いているのをご覧になっていると思います。以前の会堂の時にも南向きでしたので、草花が本当によく育ちました。けれども今回のこの新会堂も勿論南向きですし、また西側の裏庭に通じる所、そして北側の裏庭、実にどこも陽が当たるのですね。適当な具合に陽が当たりますので、表の玄関も、北の裏庭も、そして脇道はまだ未整備ですので十分ではありませんけれども、とても花がよく咲きます。

今日のイエス様のたとえ話の結びに、『良い土地に落ち、実を結んで、或るものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。耳のある者は聞きなさい』とこのように、一粒の種が地に落ちて、それが百倍、六十倍、三十倍にも実を結ぶ。その自然界の奇跡と言ったらいいのでしょうか、そういうことをたとえ話でおっしゃったわけでありまして。

中段の10節以下では弟子たちが、「何故、あの人たちにはたとえを用いてお話になるのですか」と質問しますと、「あなたがたには天の国の秘密を悟ることが許されているが、あの人たちには許されていないからである。これは旧約聖書のイザヤ書にあるように、

『彼らは聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。この民の心は鈍り、耳は遠くなり、目は閉じてしまった。こうして、彼らは目で見ることなく、耳で聞くことなく、心で理解せず、悔い改めない。わたしは彼らをいやさない。』

このように預言者イザヤは語ったけれども、今あなたがたが見ているのも同じ状態だ。」このようにイエス様はおっしゃって、だから彼らにはたとえで語るのだと言われたのです。

これは人それぞれに応じて話をする事が出来る人が、やはり話し上手な人ということになるのでしょう。正にイエス様はそうだと言わないといけないと思います。あの人たちは天の国の秘密を悟ることが許されていないから、たとえを語るということの積極的意味は、たとえというのは聞きようによってはまるで見当違いな理解をする場合があります。けれどもたとえは、人それぞれにそのたとえから自分の状況に合わせて自分なりに理解して、何か得るものがあるわけです。ですからイエス様がこのようにたとえを用いられるのは、秘密を隠すためではなくて、しかし人それぞれ、或いは時代が、神の言葉をストレートに語ってもそれを聞くことのできない人の状態、或いは時代状況というのはあるんですね。

イザヤの昔はそうだったのです。預言者が神の言葉を語っても、彼らは聞かないのですね。そしてどんどんと神から逸れて行く。そして、その神の民であるイスラエルの状態というのは、他のいかなる国々よりももっと悪い状態になっていたというのが、預言者イザヤの時代なのです。そういう昔の事実がありますので、イエス様はたとえを語られて、人それぞれにに応じて、そこから益を得るようにというのが、イエス様がたとえを用いられることのわたしは積極的な意味だと思えます。

ここで、『ほかの種は良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった』とこういうふうにあって、そのような実りがあれば凄いな、と私たちは思うわけでありませけれども、この百倍、六十倍、三十倍というのも「たとえ」であります。

先ほど庭の花のことを言いましたけれども、5月30日に「デーサービス」をした時に、第一回を記念して季節の花を植えるということで、ポーチュラカという花を植えたのが、階段の下、向かって左側に三つ並んでいます。何故ポーチュラカを選んだかと言いますと、花の苗で一番安かったからです。一株69円だったのを十株買って来たので690円なんですけれども、物凄くたくさん花が咲きます。そして萎んだのはどんどん落ちていきます。今朝も三鉢で50~60個ぐらい枯れた花が落ちていました。それは毎日のことなんですね。ですからあのポーチュラカだけでもどれだけの花をつけたかということ、もう数えきれません。百や二百や三百でできないです。もう千個以上花をつけているのではないのでしょうか。5月30日からですから、今で40日ぐらいですね。ですからこの百倍、六十倍、三十倍、これぐらいの数ではわたしは驚かないのです。何百、何千の花をつけては枯らしていく。それを毎日、教会の前庭・玄関の所で花々は繰り返しているのですね。こんなに花に水やりをしたのは生まれて始めての経験ですけれども、凄いな！という気がします。花があのように咲いていくというのは、正に“奇跡”ですね、私たちは“自然”と言うのですけれど、自然は奇跡に満ちています。

けれども悪い土地、道端に落ちたものとか石だらけの所とか、土の浅い所に落ちた種は、芽を出し、少し育つけれども、すぐに枯れてしまうと、こういうふうにあります。

教会の裏庭も、表に劣らず咲きほこっているのですけれども、裏庭で一箇所だけ、花が早く枯れてしまうコーナーがあります。他と同じように植えたのに、一番先に枯れてしまった一株があるのです。枯れてしまったので抜いて、また新しい株を買ってきて植えたのですけれども、二度目もまた枯れてしまったのですね。それで今、三度目のものを植えているのですけれど、多分三度目も枯れるのではないか。というのは、それは多分その地中の条件が悪いのではないか。きっと良い土が浅いので早く枯れてしまうのだと思うので、今度枯れるようだったら、その土を深く掘って手入れをし直さないと、あのコーナーでは必ず枯れてしまう。そういうコーナーがあります。このようなことで、私たちは本当に花を見るにつけても、驚くべき姿をそこに感じるわけです。

イエス様が今日おっしゃっている、「種を蒔く人」というのは、これは恐らく麦ですね。

そして、「種を蒔く人」というミレーの代表作があります。これは岩波書店のシンボルマークになっていますね。あれは絵そのものの縮小版ではなくて、人が手を入れて簡略にした「種を蒔く人」であります。今や岩波書店はおしもおされもしない大出版社ですけれども、創業の翌年に夏目漱石の『こころ』を出版して、そしてそのあと、『夏目漱石全集』を出して地盤を固めたようです。そしてあれは正式に商標になっているのでしょうか、シンボルマークになっているようですけれども。それを採用したのはもっと後なんですけれども、正に人の「こころ」に出版を通して良い種を蒔くという意識があるのかもしれませんが。

いずれにしてもあの画に見られるように、農法が日本の場合と違うんですね。日本のようにちゃんと畝を作って、丁寧に種を植え付けていくのではなくて、袋に入った種をパット蒔いて、風で散るわけですから、道端に落ちて鳥に食われるもの、石だらけの土の無い所に落ちるもの、茨の間に落ちるもの、そしてあるものは良い土地に落ちて、三十倍、六十倍、百倍と実を結ぶわけであります。ですから、あのような農法では実らない種があるというリスクは最初から承知の上であのような農法をとっているわけです。しかし良い土地に落ちたものは、失ったものを取り返す以上に多くの実を結ぶのだということを信じて、種を蒔く者は種を蒔くわけです。

このたとえ話の意味しているところは、神の国の豊かな完成を目指して、イエス様は伝道活動をされている。そういうことのたとえでもあると思うのであります。ですからこれはまた教会についての励ましでもあると思うのです。私たちも本当に人を救い、生かす神の言葉という種を蒔くわけですけれども、すべてが、私たちが願うように、すぐ実を結ぶとは限らない。そして、もうこれは駄目だと思ってしまう場合もあります。けれどもそれは私たちが見て駄目だと思っただけでありまして、種まきとしてのイエス様には、わたしは諦めはないと思います。それが証拠に、この間の水曜日にも炊き出しの時の祈禱会で、このマタイ福音書の9章35節以下を読みました。群集が飼い主のいない羊のように弱り果てて打ちひしがれているその様子を見られて、弟子たちに、『収穫は多いが、働き手は少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい』とこういうふうに言われて、十二人の弟子たちを選ばれて遣わされた、という話が続くわけであります。

しかしここへいくまでのイエス様の伝道を見ておりますと、5章6章7章はいわゆる「山上の説教」をされました。そして8章9章を見ますと、そこに書かれているものは、「病人を癒される」という話がずっと続いているのです。それも人間的には、この病気が治るといことはあり得ないと思うような重い皮膚病の人、悪霊にとりつかれた人、中風の人、盲人、口の利けない人、勿論様々な病気があるのですが、そういう人たちをイエス様はことごとく癒していかれたのです。奇跡を行われたのです。だからイエス様には、こういう人はそのままでもいいのだとか、治らなくていいのだとか、こういう人もあるのだ。実らない種があってもいいのだというふうなお考えは全くなかったと言っていいと思います。

我々人間はそういうことがあっても仕方がないと思ったりしますけれども、イエス様に

は仕方がないとか、諦めるしかないとか、そういうお考えはまるでないわけでありませう。そして癒しの奇跡を行っていかれたわけですね。それは限りない憐れみと、尽きることのない思いやりと、それを持ってイエス様は本当に祈られたと思います。天地万物を造られて、草花も造られて、そして我々人間も造られた神の力をイエス様は本当に呼び求めて、この人に注いで、癒してくださいとイエス様は本当に祈られたと思うのです。それが、わたしは奇跡を産んだのだと思います。

私たちの人生を顧みても、いろんな試練、困難が必ずあります。これはどうにもならないし、悪い方に悪い方にどんどんいく。そう思わざるを得ないような状況があります。私たちの北教会のもうこれは永続的な標語と言っていい、玄関にも三階の丸窓にも刻んでいます、「ヤハウエ・イルエ」＝「主は備えてくださる」、これを私たちは本当に信じ、そして経験して今日に至っているわけでありませうけれども、「主が備えてくださる」ということが怪しくなる。本当だろうか？本当ならもう少し事態が良い方にもう少し早く向いてもいいと思うのに、だんだんだんだんと事態が悪くなっていく。次々と悪いことが起きる。そういう方に会すと、わたしも、「ヤハウエ・イルエ」、この事に間違いはないと信じているはずなのに、そういう人と一緒に、“この人の場合はちょっとだめなんではないか”と、そういう弱気というか、信仰が揺らぐというか、そういう状況に人が陥るといふことはあると思うのです。

けれども私たちが信じている神様は生きておられる神様です。神様は私たちの状態を見ることが出来る方です。私たちの思いを知ることが出来る方です。私たちの訴えを聞くことが出来る方です。「生きておられる神」というのは、そういうことでありませう。神は見ておられるわけでありませうから、そして神はその御心を今行いつつあられるのですから、私たちはどのような状態にあっても、本当に神様に祈ればいいと思うのです。

その時に、何故私たちの祈りが鈍るかと言いますと、今日の箇所に戻りまして 13 章の 22 節を見ますと、「茨の中に蒔かれたものとは、御言葉を聞くが、世の思い煩いや富の誘惑が御言葉を覆いふさいで、実らない人である」とあります。人生はやはりうまく進む順調な時というのがありますね。それは本当に感謝してその時を過ごせばいいわけでありませうけれども、本当にここ一番という時には、事態を複雑に思ってしまう。見えてしまう。本当は単純なんですよ。神様が見ておられて、時期が来たらその備えのことをしてくださる。これは何があっても間違いのないのですけれども、この場合はそういかないのではないかと。こんなにいろんな事が錯綜したら、もうどう考えていいか分からないというふうなことになる。その場合には、思い煩いや富の誘惑がからんでいるのです。どうしたらうまくいくだろうか。どっちにしたら得だろうか、損だろうか。仕事をしたり、商売していると、そんな事を考えないで済む日というのは無いのですけれども、そういう中で、そういう思い煩いや富の誘惑にからめられて、もう本当に揺れ動いてしまうのです。

あのガリラヤ湖で、突風に襲われて、舟が沈みそうになって、「私たちが溺れ死んでもおかまいにならないのですか」と、弟子たちはイエス様に抗議しました。イエス様はあの時

叱られましたですね。『静まれ、黙れ、何を信じているのか』とおっしゃいました。

イエス様は、『あなたの願いは必ず実現する』とはおっしゃらない。しかし、『あなたを通して善い神の善い御心は必ず実現する』というのが、イエス様の信念なのです。だから、「溺れ死んでもおかまいにならないのですか」と弟子たちが言ったのに対して、イエス様はあの時そういうふうにおっしゃらなかったのですが、「死んでもよい」のです。

聖書における奇跡というのは、この麦のたとえでも、草花のたとえでも、不思議に死んで芽を出し、花をつけ、実るのです。ところが、世の思い煩いや富の誘惑というのは、そういう死んで甦る、この一番大事な覚悟ができないものですから、どうしたらうまくいくか。どうしたら成功するか、儲けられるか。そういうことでうまくいく時があります。小さなことはそれでいくのですが、ここ一番という時はもうそんな手法も通用しない。死んで生きるのだという、それがわたしは聖書のメッセージの底を流れている、イエス様のお言葉の根本に流れているものだと思います。そして、私は奇跡の起こる原則というものがあると思います。奇跡が起こる条件というのがあると思います。一つ、死んで甦るのだということです。そして、イエス・キリストには諦めがないのです。この世を創られた神の持てる力と祝福と憐れみを、イエス様は本当に引き出されるのです。そして私たちに注いでくださるのです。そのイエス様の憐みには限界がありませんから、そういう憐みが、やはり奇跡を起こします。

そして今日のたとえの説明として、最後の23節に、「良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて悟る人であり、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶのである」とあります。ここでは、御言葉を聞いて悟る人が、この奇跡としての実を結ぶのだとおっしゃっているわけです。この<「種を蒔く人」のたとえの説明>とある左側に括弧して、(マルコ4;13~20、ルカ8:11~15)とありまして、同じ記事が出ております。マルコによる福音書4章20節では、『良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて受け入れる人たちである』とこういふふうになっています。ルカによる福音書8章15節では、『良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである』とこういふふう言い換えられております。

それぞれ花を咲かせるのでも、先ほど言いましたポーチユラカなど、あんなになるとは思いもしないで、一番安物を買って来たのですけれども、見事に咲いています。けれども以前わたしは道端に捨てられていた枯れ木に見えた鉢植えの木を、鉢を目当てに拾って来たことがあります。それを庭においておいたら小さな芽が出て来て、何とそれはハイビスカスだったのです。見事にきれいな赤い花が咲きました。ところがまた手入れを怠ってしまいましたら、この間まで枯れ木に戻っていたのですが、今また葉を青々とつけていますので、遅れますけれどもまた咲くかなと期待をしながら水やりをしています。一時、枯れ木になることがあるんですね。駄目になったように見える時があります。

けれども、本当に御言葉に聞いて、受け入れる。受け入れたらそれをしっかりと守って、忍耐する。そして人間ですから、揺れる時があるのです。聖書の言うことは本当かな？

イエス様のおっしゃることは本当かな？自分の場合は例外の中に入るのではないかなと思うような時はありますけれども、その時は祈ればよいと思うのです。神は見ておられるのです。そしてわたしの願いは勿論あるのですけれども、イエス様があの十字架を前にして、『父よ、わたしの思いではなく、御心のままになさって下さい』と祈られました。イエス様の人生は成功しなかったのです。十字架に架けられて、殺されたのですね。けれども、イエス様は死んで、甦られたのです。ですから今の状態の闇がどんなに深くても、必ず、陽はまた昇るのです。

あのヤコブとエサウの話がありますけれども、二十数年振りに弟のヤコブがお兄さんのエサウに会う前夜、恐ろしくて、裏切った兄が今も自分を憎んでいて、会えば自分に襲い掛かるかもしれない、そういう恐れに満たされて、彼は夜を徹して祈ったのですね。「神よ、あなたが祝福してくださるまで、あなたを離しません」と言って、必死に祈ったのです。そして夜が明けます。そして彼の上に陽が昇ったと聖書は書いています。そして彼は勇気を得て、お兄さんに二十数年振りに会うんですね。するとお兄さんが、駆け寄って来て、彼を迎えてくれたという話が創世記に出ています。なんと感動的です。

私たちはいろんな事で恐れ、不安になることがありますけれども、神は見ておられます。そして私たちの祈りは、「わたしの願いではなくて、あなたの御心が成りますように」と、神様の御心が成ることが私たちにとってもそれが一番良いのですね。それが最善なのです。そのために、私たちの主イエス・キリストは手を貸して下さいます。私たちを助けて下さいます。そして、神が持たれる知恵と力と祝福のすべてを、イエス様は祈って、引き降ろして、私たちに注いで下さいますから、奇跡は起きるのです。そして私たち一人一人を通して、神様はその善き御心を実現して、本当にその祝福を百倍、六十倍、三十倍、いや、もう千倍、万倍と広げて下さるのです。

いろんな事があるけれども、神の祝福の御国は実現して行くわけです。ですから私たちは時に、暫くというか、長い時、忍耐しないといけない事がありますけれども、各自の上に太陽は必ず昇ります。神がそれをもたらして下さいます。

神が、「光あれ」とひと言おっしゃれば、そこに光があるのです。そういう神の御目の下に私たちの日々はあるのです。生ける神様を信じて歩みを続けたいと思います。

お祈りいたします。

憐み深い主イエス・キリストの父なる神様。

困難の中にある友人、知人、また教会もあります。そして多くの人が諦めざるを得ないような窮地に陥ることがあります。しかし、主よ、どうか私たちは命の御言葉をこの心に、この体に、この魂に、植えつけていただいた者たちとして、あなたを信じて実を結ぶことができますように、あなたの祝福の実を結ぶことができますようにお支えください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン